

— コミュニティー住民自治会によるブラクール方式と HANDS —

HANDS が FOT の事業を引き継いで半年がすぎました。同じ先住民族コミュニティーを対象としていますが、現地協力組織の支援理念の違いから、経済的自立に向けた歩みはかなり異なっています。今後一つの会として、現地のそれぞれの方式を尊重して支援するにはどうしたらいいかを考えるために、「ブラクール」に焦点を当ててみました。

＜120 人の子どもが学ぶ小学校の運営を、35名の会員で支えています＞

FOT 会員の4割に当たる35名が、「ブラクール・チボリ・マノボ民族コミュニティー自治会小学校」の運営を支えています。精神里親制度の下では、支援金は子ども一人一人に手渡されるわけではなく、ブラクールの場合、5名中4名の教師の給与に充当され、近くに公立学校がないブラクールの約120名の児童に、初等教育の機会を与えています。

＜自主運営の見通し＞

自治会は住民が提供した72haの共同管理地に、マホガニーなどの用材や果樹・アバカの苗を植えて、将来の自主運営に備えています。約3haのアバカについては、一部すでに収穫の時期を迎えました。果樹とともに、数年後には小学校運営の有力な財源になると期待されます。

＜山羊の繁殖プロジェクト＞

会員のご寄付で昨年秋から準備が進められている山羊の飼育・繁殖事業も、栄養補給とともに財源として期待されます。

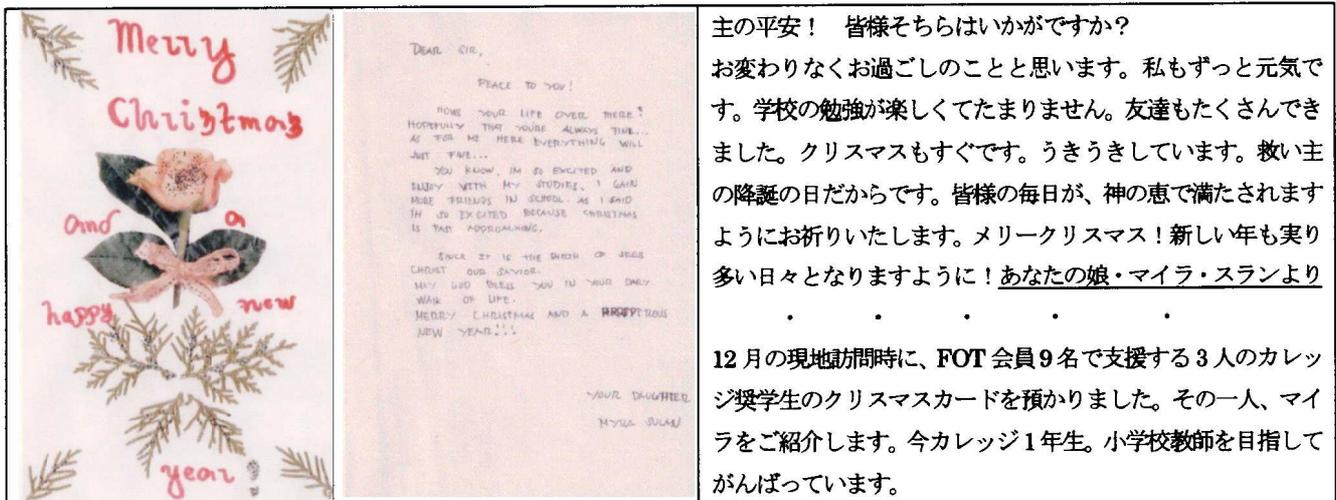
＜支援金の削減計画＞

平成14年度のブラクール支援は13年度より20%減らしました。アバカや山羊からの収入実績がまだ十分でない現状から、15年度は、10%削減が現状維持の支援を現地は希望しています。

＜住民自治会が管理するブラクール方式と、ミッション管理のピラーン民族地域＞

ブラクール方式は、個々の住民の経済的自立支援よりも、コミュニティー自治会共有地における自主財源事業に重点をおき、コミュニティーとして外部支援なしで住民への教育や医療サービスを行おうというものです。

ピラーン地域では、個々の住民自立支援と、ミッションであるCMB管理の自主財源支援の双方を平行して実施しています。ブラクールの共同管理地域72haは、約10年前にミッション(SCM)から住民自治会に管理が移管されました。



— モスン (チボリ語のつぼみの意味) 教育プロジェクト —

人口の約半数がチボリ民族などの先住民族というレイクセブ町は、現地のミッション(SCM)と1980年に支援を開始した日本の里親の会(JOFPA)によって、初等教育の普及という点で大きな成果を上げましたが、一方で、能力的、経済的に学校を続けられない子どもの増加が問題となり、未就学児童も特に周辺地域にまだ多く見られます。

広く先住民族の住民自治会事業をサポートしているPFPは、このレイクセブのテバツ、バサグノフォク二つのコミュニティーで、昨年、未就学・中退児童を対象にしたモスン教育事業を試験的に実施しました。非先住民族に基準をおいた画一教育が、チボリの子どものドロップアウト増加の一因との観点から、チボリ語を使って、しかも有機農業、伝統工芸など実践のなかで知識と技能を身につけさせようというものです。したがって、教師が一方向的に教える授業形態をやめました。この理念は、藤原先生、レックス氏の長年の体験および地元の学者たちの教育理論から導き出されたと聞きました。次のステップとしてのチボリ語による教科書作りが、昨年、助成が決まる直前に藤原先生が病気になられて中止になったとの経緯から、HANDSとしては、申請中の財団助成を受けることができれば4月から実施の予定です。